

## 『堺市史』編纂と二代目中村富士郎ゆかりの品々

齊 藤 利 彦

はじめに

明治期から昭和初期にかけて、いくつかの地方史誌が刊行されたが、そのなかで『大阪市史』と並び評されるのが『堺市史』全八巻である。<sup>①</sup>

『大阪市史』編纂に刺激をうけた堺市は、明治三十五年（一九〇二）一月より市史編纂事業を開始したが、財政難のため、翌六年（一九〇三）に編纂を一旦、中止する。

しかし、関東大震災による史資料散逸が考慮され、大正十三年（一九二四）一月、同市は市会の承認のうえ、市史編纂部を設置し、本格的な編纂事業を再開した。監修者に京都帝国大学文学部国史学第一講座の三浦周行を招き、編纂長中村喜代三（のちに牧野信之助）のもと、編纂実務や史料収集実務などを行なうメンバーには、時期などによって異同はあるが、小葉田淳、藤直幹、岩橋小弥太、山根徳太郎など、のちの歴史学界を背負う逸材が関わっている。

ところで、『堺市史』第三巻では、近世の文化や芸能に関する項目をたて記述しているが、そのなかで、天保改革の芸能統制によって摂河泉三ヶ国追放刑に処せられ、堺に移住した大坂の役者、二代目中村富十郎（以下、特に断らない限り富十郎と略）に関して言及している。

市史編纂時、富十郎に関する史資料調査と収集が行われているが、同市史編纂過程のなかで、どのような調査がなされ、どういった史資料が収集されたかは判然としていない。この点は近世の歌舞伎役者に関する史資料の、近現代への伝承・伝来を考えるうえでも注目できよう。

かつて筆者は、中央図書館が所蔵する富十郎関係番付について言及したが、本稿では、そのほかの史資料について考察してみたい。

## 第一章 『堺市史』編纂と二代目中村富十郎

『堺市史』は戦前に編まれた地方史誌のなかで白眉とされるが、その理由のひとつに、第四巻から第六巻の資料編が史料を原文のまま翻刻収録したことをあげることができる。当時の史料への考えかたからすれば、これは、画期的なことであった。<sup>2)</sup>

その史料収集は、地元はいうにおよばず、全国規模で行われたが、収集した史料群は筆耕され、『堺市史史料』として項目ごとにまとめられた。その冊数は一四五冊を数える。

編纂事業は最終巻の第八巻が刊行された昭和六年（一九三二）をもって終了し、『堺市史史料』（以下、『史料』と略）は、市史編纂部の調査記録『史料探訪目録』などとともに、堺市中央図書館（以後、中央図書館と略）へ移管され

た。その後、堺市は太平洋戦争の戦災により市域が全焼し、貴重な史資料が滅失した。『史料』に筆耕されている原史料も、このおり、大部分が焼失、あるいは散逸してしまう。

幸いにして、『史料』一四五冊は戦災をのがれ、いまに至っている。太平洋戦争の戦災により、市域の貴重な史資料の大部分を失った堺市にとっては、史料の筆耕集とはいえ、該書は同市の歴史を伝える史料として、重要な存在といえる。

## 第二章 市史編纂と富十郎関係品の収集

### 第一節 『史料探訪目録』と「富十郎遺屋寄託証文」

拙稿において、市史編纂部が市史の近世文化・芸能の項目執筆用に富十郎が出動した役割番付二十二枚を購入するなどの経緯や、中央図書館への移管時期については考察したが、同編纂部では、そのほかに、富十郎関係の史資料について調査・収集を行っている。そのひとつが八文字とよ氏への調査である。

大正十三年（一九二四）九月十六日、同編纂部はとよ女宅を訪れ、富十郎ゆかりの品々を調査した。彼女は富十郎の娘の養子である四代目中村歌七の実妹の孫にあたる。調査日時より、編纂が再開されて間もなく、とよ女宅に調査へ出かけたことがわかるが、このことは同市編纂における富十郎の位置づけをうかがうことができる。また、調査の実施としての速さは、堺在住の関係者が存命していたことも関係しているであろう。

さて、この調査の成果のひとつが「富十郎遺屋寄託証文」の発見である。現在、現史料は確認できないが、『史

料採訪目録』のなかに簡単な内容の説明が記されている。

午極月日、富十郎ノ遺子八幡屋由次郎及富之丞ヨリ伯龍及松鶴屋ニ宛タルモノ、伯龍ハ富十郎ノ娘ノ養子たる四代目中村嘉七(名古屋座)ノ妹ノ嫁ケタル先ニシテ本名煎島龍吉トイフ、現所藏者八文字とよノ勇祖父ナリ、八文字とよノ現住所ハ実ハ富十郎ノ遺屋ナリ、松鶴屋は即四代目中村嘉七ナリ、

この証文は富十郎の遺児、八幡屋由次郎、中村富之丞から、伯龍こと、煎島龍吉と四代目中村歌七に宛てられたもので、その内容は富十郎亡き後、新地龍神町二丁四五番地の家屋は彼の遺児、八幡屋由次郎、中村富之丞から富十郎の娘の養子であつた四代目中村歌七とその妹の夫である煎島龍吉に寄託するといふものであつたらしい。

発信年月日は「午極月日」であつたようだが、富之丞と歌七の没年などを勘案すると、富十郎没後三年目にあたる安政五年(一八五七)と推考される。富之丞が養子であることはわかっているが、由次郎についてははっきりしない。

また大正期、八文字とよ氏がこの遺屋に住まいしていたことがわかるが、現在、中央図書館には「中村富十郎住居跡」と題する写真が一葉伝来している。この写真は『堺市史』の編纂資料であるが、写っている家屋そのものに富十郎が住んでいたかどうかは定かではない。被写年代はおそらく、とよ女宅に調査に訪れた九月十六日前後と推定される。

## 第二節 その他の富十郎関係品

『史料採訪目録』から、とよ女宅にはこのほかにも富十郎関係の品々が残っていたことが確認できる(8)。それらを列挙してみると、つぎの一〇点となる。

- |                  |     |
|------------------|-----|
| ① 「女鉢の木絵看板屏風」    | 一 双 |
| ② 「錦絵貼交屏風」       | 一 双 |
| ③ 「帰館の辞摺物額面」     | 二 面 |
| ④ 「中村富十郎使用差出」    | 一 個 |
| ⑤ 「中村富十郎使用部屋通土瓶」 | 一 個 |
| ⑥ 「森徹山富獄之図中村慶子賛」 | 一 個 |
| ⑦ 「芝居古番付」        | 二 冊 |
| ⑧ 「芝居番附」         | 四 綴 |
| ⑨ 「堺新地北新芝居番附」    | 一 枚 |
| ⑩ 「宗壺筆大原女二彼岸桜図」  | 一 幅 |

これらの品々について、伝存が確認できないため、詳細は不明である。ただし、前述した証文同様、『史料採訪目録』に簡単な内容説明が記されていることから、概要を把握することは可能である。以下、一点ごとに確認

していきたい。

①の屏風は「中村富十郎」と記されているのみで、②は富十郎の役者絵が二枚貼られており、一枚は祇園お梶に扮する役者絵、もう一枚は「嫁おまつ」に扮した役者絵である。特に前者の役者絵の説明に「松江改富十郎」とあることから、富十郎襲名時のものと推考される。

③の摺物額面は、山東京山の選文の「歌川豊国及び京山画」したもので、安政元年、富十郎が江戸を去るおりに鼻眞に配った別辞の摺物であったようである。

④の差出は三寸四方の朱塗りのもので、富十郎の紋「矢車ノ徴」が施されていた。⑤の土瓶にも「水ニ矢車ノ紋」が施されていたという。⑥の図は富十郎の讃があり、説明には、

右肉筆二限ズ、木板摺なるが如し、殊ニ賛ハ慶子ノ肉筆ヲ刻タルモノニ限ズシテ板下風ノ文字ナリ、とあり、どうやら富十郎の肉筆でもなく、肉筆を彫ったものでもなかったらしい。そのため、賛自体も富十郎の筆であったかは疑わしいといえよう。

⑦⑧⑨はそれぞれ番付である。⑦については詳細な説明は記されていない。⑧は明治期のもので堺卯育座、住吉座、末広座などの番付が綴じられていたものである。富十郎とは直接関係ないが、おそらくは四代目歌七関係の番付ではないかと推測される。⑨は富十郎関係のもので、「嘉永四、三」「外題ハ寿式三、仮名手本忠臣蔵」という説明文があることから、嘉永四年三月新地北芝居の役割番付であることが判明する。この興行で富十郎は寿式三番叟の三番叟、忠臣蔵のお軽、おたか、菜の方、奥方はしとみを演じた。⑩の彼岸桜図には、

付箋二「今井殿様ノ筆、今井屋敷ヨリ拝領」

という説明文がある。この「今井殿様」とは確証が得られないが、「今井」「今井屋敷」という表現から、今井宗

久を祖とする、旗本今井家のことではないだろうか。

今井家は宗久で有名であるが、その子宗薫は秀吉の寵愛を受けた茶人で、お伽衆のひとりともなった人物である。秀吉の死後は秀頼に使い、千石を領した。しかし、時代が豊臣から徳川に移り始めると、家康に接近し、関が原の合戦では東軍として従軍、功績として三百石を加増された。大坂の陣では徳川家との関係を疑われ、子の彦八郎とともに大坂城に監禁されるが、織田有楽斎の斡旋で釈放されると、徳川方として大坂の陣に参陣した。そのため元和三年（一六二七）、所領千三百石を安堵され、旗本に列することとなる。その後、子孫は茶事をはなれ、江戸幕府に仕えるようになった。同家の屋敷は宿院町にあり「今井屋敷」と称され、東西二九間・南北三二間もの広大なものであった。また同家は旗本札を発行するなどもしている。

おそらく、富十郎が拝観した「彼岸桜図」は、堺の旗本今井家からのものと推考され、同家は富十郎の有力な鼻祖であったのではないだろうか。と考えられる。

### 第三節 松田しげ氏所蔵の富十郎関係の品

『史料探訪目録』には、とよ女のほかに松田しげ氏宅にも伺い、富十郎関係の所蔵品を調査したことがわかる。同書によると、調査は大正十三年十月二十三日に実施されている。調査先の松田氏は戎之町大道に住まいしていた人物であるが、その詳細や富十郎との関係などは判然としない。品は一点で、「中村富十郎使用土瓶」であった。

松田氏が住む戎之町大道は、天保の改革で摂河泉三ヶ国追放となった富十郎が、堺に移住して小間物屋を営んだ町である。この町に土瓶一個とはいえ、富十郎ゆかりの品々が伝存していることは注目できよう。おそらく、

富十郎が営んだ小間物屋と何かしらの関係があったのだろう。あるいは、富十郎の鼻祖であったのであろうか。

## おわりに

以上、『堺市史』編纂過程のなかで調査、史料収集された二代目中村富十郎関係史料について、整理・検討した。同市史は戦前編まれた地方史誌のなかでも白眉であるが、近世の文化や芸能への言及もあり、そのなかで、堺にゆかりのある近世後期上方歌舞伎の重鎮、二代目富十郎について調査がなされたのである。調査内容から、富十郎関係伝存史料の存否確認といった性格であった。

彼の、とりわけ、肉親関係者を訪ね史料調査を行っていることが判明したが、編纂が再開された当初から調査に訪れていることは、同市編纂のなかで、堺ゆかりの人物として、富十郎を重要と位置付けていたことがわかる。この調査で存在が確認された富十郎関係の品々は、現在、伝存は確認できないため、おそらく、のちの戦災などで散逸したのではないかと考えられる。

『堺市史』編纂と富十郎関係史料の調査について考察することは、換言すれば、近世の上方歌舞伎役者ゆかりの史資料が近現代へどのようなかたちで伝承・伝来したかを考究することを意味し、近現代上方歌舞伎に内在する、近世上方歌舞伎を見出すうえでも注目できるものといえる。



注

- (1) 藤本篤「戦前大阪府下の市町村史編纂動向」(黒羽兵治郎先生喜寿記念会編『大阪地方の史的研究』)。  
同右。
- (2) 同右。
- (3) 拙稿「堺市中央図書館所蔵近世堺芝居番付考」(『堺研究』三〇号)。
- (4) 拙著『近世堺と歌舞伎』(大阪公立大学共同出版会、二〇〇九)。
- (5) 前掲注3。
- (6) 堺市中央図書館蔵。
- (7) 同右。
- (8) 同右。
- (9) 同右。

追記

本稿は、平成二十一年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)の成果の一部である。

